

タイトル	史料と解釈：スコットランド中世史研究の問題
著者	常見，信代；TSUNEMI，Nobuyo
引用	北海学園大学人文論集(62)：25-52
発行日	2017-03-31

史料と解釈

—— スコットランド中世史研究の問題¹ ——

常 見 信 代

はじめに

2014年のスコットランドの独立を問う住民投票は、現在はイギリスの一地域にすぎないスコットランドが、かつては独立の国（スコットランド王国）であったことを世界に広く知らしめる結果になった。実際、イギリスは「複合国家」であり、イングランドが1536年にウェールズを、1707年にスコットランドを、1801年にアイルランド（現在は北アイルランド）を、それぞれ併合して成立した国家なのである。

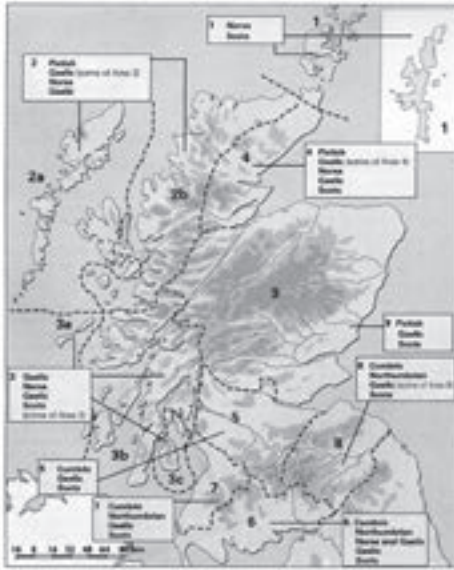
国としてのスコットランドが成立したと言えるのは、13世紀のことであるが、この国もまた、中世初期にブリテン北部に存在したさまざまな民集団を取り込んだ「複合王国」であった。その痕跡は、現在のスコットランドの地名に刻まれている（地図1）。筆者は、国としての「スコットランドの成立」の過程を可能な限り特定地域や特定の一族を通して具体的に描くことを近年の課題としてきた。わが国では、「スコットランドの成立」を本格的に説いた書籍はほとんどないのが現状である²。したがって、概説を書く前に個別研究の積み上げが必要であり、そのためにはまず史料とその解釈を詳しく検証したいと念じてきた。

これはとてつもない課題であった。最大の理由はもちろんスコットラン

¹ 本稿は2016年2月6日に北海学園大学において行われた「最終講義」に加筆したものである。

² 飯島啓二（1991）が唯一の文献である。

地図 1 現在の地名に残る多言語の痕跡



(解説)

- Pictish: ピクト語: 島嶼ケルト語群ブリトン語系
- Cumbric: カンブリア語: 島嶼ケルト語群ブリトン語系
- Gaelic: ゲール語 (アイルランド語): 島嶼ケルト語群ゴイデル語 (ゲール語) 系
- Norse: ノルド語: ゲルマン語群北ゲルマン語系
- Scots: スコット語・スコットランド語: 中期英語 (ゲルマン語群西ゲルマン語系) からの派生言語
- Northumbrian: ノーサンブリア英語: 古英語のノーサンブリア方言

Taylor (2002), p. 13 より転載

ド史を専門として日が浅い筆者自身の能力にあるが、それに加えてスコットランド王国の成立過程がきわめて複雑であり、さらに、史料もまたきわめて少ないことである。しかも、史料の来歴も非常に入り組んでおり、きわめて問題の多い史料なのである。とりわけ中世初期についてはそうである。言うまでもないことであるが、過去の出来事や人物などについて記した記録や文書は、あくまでも書き手の目を通した記録であり文書である。そこには出来事などに関する書き手の「解釈」が含まれている。したがって、それぞれの史料を書かれた当時の文脈のなかにおいて書き手の「解釈」に可能な限り耳を傾けること、これが、歴史学徒の初歩にして本来の仕事であろう。我われの価値基準を過去に投影することではないのである。教員生活の最後に、浅学の身を顧みずに初心に帰って、「スコットランドの成立」過程のなかでも、特に難解きわまる初期について、そのあらすじを最終講義の際に紹介した図版を用いながら描いてみることにする。

1 ダール・リアダのスコット

スコットランドとは、地理的にはティード川とソルウェー湾を結ぶ線の北を範囲とするが、中世初期には、この範囲内にスコット、ピクト、ブリトンなど文化的背景の異なる複数の民集団が分立していた（地図2）。「スコットランドの成立」とは、これらの民集団が「スコットの王」のもとでその文化的背景のいかんにかかわらず、「スコットランド人」と規定され、その地理的範囲全体が「スコットの土地」つまりスコットランドと呼ばれることをいう。これが史料の上で確認されるのは12世紀末から13世紀初めのことであり、そのプロセスはきわめて複雑である。

そもそもスコット‘Scoti’とは、アイルランド人を指した言葉であり、スコットランド‘Scotia’は本来アイルランドを意味した。したがって、「スコットランドの成立」に関する「史料と解釈」の検証の第一段階は、アイルランド人であるスコットがダール・リアダ王のもとでスコットランドの西岸、アーガイル地方とその島嶼地帯に定住した経緯についての検証であり、第二段階は、これら西部のスコットが東部のピクトと一体化してその国がアルバ‘Alba’、その王がアルバ王‘rí Alban’、その人びとがアルバの人びと‘fir nAlban’と、いずれもゲール語（アイルランド語）で表記された経緯についての検証である（地図3）。しかし、この二つの段階の検証は、あまりにも複雑であるため、ここでは定説をめぐる近年の研究動向を紹介するにとどめる。

アイルランド人であるスコットがスコットランド西部に居住した経緯について、ながらく定説となってきたのが征服・移住説である。アイルランド北東部のアルスター地方にいたダール・リアダ王国のスコットが「エルクの息子ファergus」に率いられて5世紀末頃アイリッシュ海を挟んだ対岸の一角を征服して移住し、王国の中心を移したという説である³。その根

³ Anderson (1973), pp. 131-39; Bannerman (1974), pp. 73-75; Foster (1996.), p. 13.

地図 2 800 年頃の「スコットランド」



Driscoll (2002), p. 9 より転載

地図 3 アルバ王国



Foster (2014), p. 3 より転載

拠になったのが、一つは「ティゲルナハ年代記」501年の記述であり⁴、もう一つがダール・リアダ王家の系譜をゲール語で記した「アルバの人びとの歴史について」である⁵。しかし、近年、この根拠が揺らぎ始めている。なぜなら、ゲール語の‘Alba’は、本来はブリテンの意味であり、それがス

⁴ *Annals of Tigernach*, 501. 3. 501 年はファergus の没年であり、移住の年代は不明であるが、500 年頃とするのが定説とされてきた。

5. ‘Miniugud Senchasa fher nAlban’. 多数のマニュスクリプトが現存するが、もっとも重要とされるのが ‘Trinity College Dublin, Ms. H. 2.7’ で、Bannerman (1974), pp.41-49 に原文と英訳が収録されている。また、Dumville (2002, pp.201-203) がその改訂版を出している。内容は、「……Erc には 12 人の息子がいて、そのうち 6 人がアルバを領有した」と記し、彼らの子孫たちの名前が続く。定説の「エルクの息子ファーガス」は、アルバに渡った一人で、その子孫の名前はいずれもダール・リアダ王の名前と一致する。しかも、こうした系譜を綴った後に、7 世紀のダール・リアダにおける軍役に関する記録が続き、一見すると、7 世紀の記録のような体裁である。

コットランドを指すようになるのは10世紀以後だからである。「ティゲルナハ年代記」の記述は10世紀の挿入と推測されている⁶。後者の系譜書「アルバの人びとの歴史について」も同様であるが、特にこれまで看過されてきたことがある。それは、すべてのマニスクリプトには、この系譜書につながる形でアルバの王コンスタンティン・マク・ケネス（997年没）の系譜が綴られており、コンスタンティンからケネス・マク・アルピンへ、さらにダール・リアダの王ガブラーンにまでさかのぼらせていることである⁷。つまり、二つの系譜書を一体化することによって、アルバの王がダール・リアダの支配王家（ケネール・ガブラーン）の出身であり、「エルクの息子ファergus」の子孫であると主張したのである。10世紀末にアルバの王家の正統性を証明するために編纂された文書と解釈される。

考古学者もまた、アイルランドのスコットによる征服と移住に疑問を投げ、ときには否定している。スコットランド西部のアーガイル地方にはアイルランドからの侵入や移住を示す考古学資料がほとんど無いことはすでに1970年代から指摘されてきたが⁸、A. レーンを代表に1980年代からダール・リアダの首邑といわれるドゥナド（Dunadd）の本格的発掘調査が実施されて丘砦の全容があきらかになってきた（図1）。E. キャンベルは、この発掘調査の中心メンバーで、その成果を踏まえて2001年に論文「ス

⁶ Dumville (1993), p. 187. 「ティゲルナハ年代記」は10世紀のクロンマクノイズ・グループ」に由来する。この年代記の問題点について、Grabowski. & Dumville (1984), ch., II ; 常見信代 (2015), 215-18 頁。

⁷ 'Genealogia Albanensium', in Bannerman(1974), pp. 65-66. なお、ゲール語史料ではケネス・マク・アルピンは Cináed mac Ailpin, コンスタンティン・マク・ケネスは 'Causantín mac Cinaed' であるが、本稿では叙述の便宜上、カタカナ表記は英語名による。

⁸ 「スコットが移住したとすれば、〔アイルランドから〕カバンを持たずに手ぶらで来た」と表現され (Alcock, 1970, p.65), Foster も先史遺跡の類似性からアイルランド北東部とスコットランド西部との接触・交流は新石器時代に始まっていた可能性を指摘していた (1996, pp.13-14)。

図 1 ドゥナドの丘砦 (ヒルフォート)



E. キャンベルらの発掘によって、先史時代から儀式的場であり埋葬地でありまた砦として使用されたことがあきらかになり、中世初期にはドゥナッドはダール・リアダ王国の首邑と言われる。麓を海に続くアド川が流れクライド湾やマル島、アイオナ島へ出ることができる。



砦内部への入り口付近の岩にある足型のくぼみ
伝承によれば即位式で新王がここに足を入れて先人に倣うことを誓ったという。
この儀式は大地との婚姻の儀式でもあり、五穀豊穡、子孫繁栄を願ったとも言われる。
ともに筆者撮影



ドゥナドで発見されたブローチなどの型



penannular brooch (700 年頃)

© National Museums Scotland. Licensor www.scran.ac.uk.

ドゥナドからは粘土製の型が 700 あまり発見された。その大半は用途がわからないが、識別できる 180 のうちのほとんどはブローチ用である。金属で製造された装飾ブローチ、特にアイルランドやブリテン西部に特徴的な環状形の金属製ブローチ（penannular brooch）は、男性の身分の象徴であり、ドゥナドで製造されたブローチは、ダール・リアダの王だけでなく従者や従属王などへ与えるなど、外交上の贈答品として用いられたと推測される。詳しくは Lane & Campbell (2000), pp. 106-127. 右は、スコットランド南西部のエア地方で発見された環状形ブローチ。典型的なアイルランド様式。

コットは「アイルランド人か」を発表したが、これが大変な反響を呼ぶことになったのである。アイルランド北東部からの征服や移住を否定しただけでなく、スコットはもともとアーガイルに居住していたと主張し、さらに「文化的影響があったとすれば、スコットランドからアイルランドへと向かった」と結論したからである⁹。

E. キャンベルの主張は、従来の解釈の欠陥を鋭く突き、中世初期アイルランド史研究に一石を投じることになったが、いまだに仮説の域を出てい

⁹ Campbell (2001), pp. 286-87. その論拠は、移住とされる時期のアイルランドに特徴的な居住形態 ‘rath’, ‘cashel’（土塁、石の防壁で囲まれた円形集落）がアーガイル地方にはその痕跡もないことである。他方で、アーガイル地方の ‘crannog’（湖上集落）は鉄器時代初期から建造されたことが科学的に明らかにされているが、アイルランドでそれが建造されたのは 600 年以後だからである。

ない。アーガイル地方とアイルランド北東部との間は最短距離で20キロに過ぎず、鉄器時代から交流していたことは当然と言えば当然である。しかし、アーガイルのスコットがアイルランド北東部に進出してダール・リアダ王国を拡大したのかどうか、判断するにはあまりにも史料が少ない。しかも、アーガイル地方で発掘調査が行われたのは現在のところドゥナドだけであり、さらなるデータの蓄積が必要であろう。

このように、ダール・リアダ・スコットのブリテンにおける歴史の始まりについて、従来の定説が揺らぎだしているが、それに代わるあらたな説が構築されていないのが現状である。いずれにせよ確かなことは、563年頃に聖コルンバがアイルランドからスコットランドの西岸の島アイオナに移って修道院を創設したとき、すでにその地帯一帯にはゲール語を話す人びとが居住し、キリスト教徒の王がいたことである¹⁰。700年頃に書かれたアダムナーンの『聖コルンバ伝』でも、731年に完成したベータの『イングランド人の教会史』でも、スコットランド‘Scotia’はアイルランドの意味で、スコット‘Scoti’はアイルランド人の意味で、それぞれ用いられ、これらブリテン島西岸地帯のスコットは「ブリテンのスコット」と注釈づきで表記されている¹¹。

『聖コルンバ伝』も『イングランド人の教会史』も、ダール・リアダのスコットに関係する史料ではあるが、アダムナーンの主たる関心はウィット

¹⁰ コルンバはアイオナ上陸の直後に王に面会している（VC, I-7）。また、別の機会に王の首邑（caput regionis）を訪れ「ガリアの舟が着く」のを目撃している（I-28）。その場所は、ドゥナドが定説であるが、ガリアからの舟が川をさかのぼるのは困難との指摘もあり、海に面したダノリー（Dunollie）とする説もある。Fraser（2009）, p.243. ただしダール・リアダ（Dál Riata）の名称は『聖コルンバ伝』にもベータの『教会史』にもない。初出は *Annals of Ulster* の616年の項（ダール・リアダ王）である。

¹¹ VC, III-46; Bede, V-23, IV-26. なお、地図2にあるように、7世紀から9世紀のブリテンのスコットとアイルランドのスコットの両方を表すのに、便宜的に「ゲール人」Gaels（ゲール語を話す人びと）が用いられることもある。

ビー教会会議で失墜したコルンバの権威を回復させるとともにアイオナ修道院をローマ教会に沿わせることにあり、バーダもブリテンがローマ教会のもとで一つにまとめられることがその著作の主たるテーマであった¹²。彼らがダール・リアダに言及するのは、こうした関心にかかわる場合にほぼ限られている。したがって、ダール・リアダのスコットの動静については、アイルランドの年代記、特に740年頃までアイオナで書き継がれた「アルスター年代記」が唯一の史料と言っても過言ではない。しかし、740年代以後は、記録の場がアイルランド中部の修道院に移り、ブリテン北部に関する情報は非常に少なくなる。もっとも、「アルスター年代記」などアイルランドの年代記は、王や修道院長らの死亡やおもな戦いを記しただけであり、もともと情報量は少ないのであるが。

なお、9世紀以前のダール・リアダのスコットとピクトについては、王の名前と統治年数を記した名簿の一種である‘king-list’が複数、伝わっている。しかし、前者の名簿はすべて13世紀、14世紀の手が加えられており、イングランド王権との抗争を背景にスコットランド王国がイングランド王国よりも由緒ある歴史をもつ根拠となるように仕立て上げられている。後者のピクトの‘king-list’も、ピクト自身の手による唯一の史料であり重要であるが、原本は伝わらず、すでに加工された形で14世紀後半から16世紀にかけての写本に書き写されている¹³。いずれも写本の来歴が非常に複雑であり、研究史も難解を極めている。このため、本稿ではこれらについてすべて割愛した。

2 アルバの国

「アルスター年代記」のダール・リアダ・スコットに関する記載も、740

¹² 常見信代（2014）、72-79頁；常見信代（2015）、202-208頁参照。

¹³ Anderson の巻末（pp.245-91）にさまざまなマニュスクリプトから起こした、ピクトとスコットの‘king-list’が収録されている。

年代を境にいつそう少なくなる。下記に示したように、とりわけ 9 世紀前半のダール・リアダについてはほとんど記載がなく、このことが、「スコットランドの成立」の第二段階、アルバの国の検証を非常に困難にしている。アルバはゲール語であるから、ゲール語が支配言語になったことは確かであろうが、それはどのような経緯によるのか。

「アルスター年代記」のピクト・スコット関係

- 736 Óengus m(mac). Fergus rex Pictorum がダール・リアダを攻略、ドゥナドを占領
- 741 Óengus m. Fergus がダール・リアダを打倒
- 761 Óengus m. Fergus, rex Pictorum が死亡
- 781 Fergus m. Eeach ri Dal Riati¹⁴ が死亡
- 789 ピクトの間で戦い、Caustantín が勝利
- 802 アイオナが異教徒に焼き打ちされる
- 806 アイオナの修道士 68 人が異教徒に殺される
- 820 Caustantín m. Fergus, rex Fortrenn¹⁵ が死亡
- 834 Óengus m. Fergus, rex Fortrenn が死亡
- 839 異教徒と Fortriu の人びと (fir Fortrenn) が戦い Eongan m. Oengus, Bran m. Oengus, Aed m. Boanta その他大勢が戦死
- 858 Cinaed m. Ailpin rex Pictorum が死亡
- 862 Domnall m. Ailpin, rex Pictorum が死亡

¹⁴ 「ダール・リアダ王」。下線はすべて筆者。

¹⁵ 「ピクト王」と同義。フォルトリウ (Fortriu) は北東部のマリ湾岸一帯を指すが、この地方の王が 7 世紀後半からピクト王位を占めたことから、ピクト王 rex Pictorum は「フォルトリウ王」rex Fortrenn とも呼ばれた。フォルトリウの地理的位置について、Woolf (2006), pp. 182-201.

- 876 Caustantín m. Cinaed rex Pictorum が死亡
878 Aedh m. Cinaed, rex Pictorum が死亡
900 Domnall m. Caustantin, ri Alban¹⁶ が死亡
952 Caustantin m. Aedh ri Alban が死亡

この問題について 19 世紀以来、不動の定説だったのが、ダール・リアダ王ケネス・マク・アルピンによるピクトの併合と新しい王国の建設説である¹⁷。しかも、「アルスター年代記」では、820 年と 834 年に死亡した「ピクト王」の二人がいずれもゲール系の名前であることから¹⁸、定説では、スコットによるピクト併合はケネス以前にすでに始まっていたが、839 年に異教徒つまりヴァイキングに襲撃されてスコットの貴顕の大半が戦死し、その空白をケネスが埋めたと解釈された。

ところが現在は、スコットによるピクト併合と新しい王国建設説は大半の研究者によって否定されている¹⁹。その根拠の一つが、820 年、834 年に死亡したピクト王の二人は、確かにゲール系の名前であるが、これはアイルランドの年代記が固有名詞を基本的にゲール語形で表記するためであり、この二人は、ピクトの‘king-list’に記された‘Castantin f. Uurguist’と‘Unuist f. Uurguist’であるという²⁰。しかも、スコットがピクトを征服したのではなく、その逆であり、741 年にピクトがダール・リアダを征服し、

¹⁶ 「アルバ王」。

¹⁷ 我が国を含め概説書の大半は最近まで征服説である。

¹⁸ 781 年に死亡したダール・リアダ王ファーガスの息子と解釈された。

¹⁹ Dumville (1997), pp. 35–6; Herbert (2000), pp. 62–72; Broun (2005), pp. 264–66; Charles-Edwards (2008), pp. 168–88; Clancy (2010), pp. 358–62. 一部修正しつつ征服説を支持するのが、Duncan (2002), p. 15; Hudson (2014), pp. 186–202.

²⁰ ピクトの‘king-list’は、使用言語がラテン語であるが、人名など固有名詞はピクト語形で表記されている。‘king-list’については上掲註 13 参照。

それ以後ダール・リアダはピクトの属国になったと考えられる²¹。つまり、839 年にヴァイキングに襲撃されて大打撃を受けたのは、スコットではなくピクトだったことになる。

ケネス・マク・アルピンによるピクト征服とそれによる新しい王国の建設は、スコットランドの歴史のなかでもっとも親しまれた話の一つであり、ケネスはケネス 1 世の名前でスコットランド最初の王として語り継がれてきた。しかし、この話の一番の問題は証拠がないことである。ケネスを征服者とする史料は、すべて後代に書かれている²²。むしろ、同時代史料の「アルスター年代記」では、ケネスとその弟、息子ら 4 人は「ピクト王」となっている。ケネスの子孫の称号が変わるのは 900 年頃からであり、その国は「アルバ」、その王が「アルバ王」と表記されるようになる。もちろん、「アルスター年代記」をはじめとするアイルランドの年代記は 10 世紀頃から全般的にラテン語からゲール語に変わる傾向があり²³、‘Alba’は‘Pictavia’の、‘ri Alban’は‘rex Pictorum’のゲール語訳の可能性もある。しかし、フォース湾以北の住民の表記が変わったのはアイルランドの年代記だけではない。イングランドでもほぼ同じ頃からフォース湾以北の住民はピクト

²¹ 825 年にアイオナがヴァイキングに襲撃された際にコロンバの聖遺物を守って修道士が殺害されたが、この話を知ってフランクの Walahfrid Strabo が 840 年頃にした詩のなかで、アイオナを「ピクトの島」‘insula Pictorum’と記している。Clancy (2004a, pp. 73-76) は、825 年だけでなく 840 年代にもまだダール・リアダがピクト王に從属していたと解釈する。

²² その一つが 14 世紀中葉にヨークで作成された写本に書き写された「アルバ諸王の年代記」で、ケネスが「ピクトを破壊して」、「ピクトの領土を支配した最初のスコット」と記されている(‘Chronicle of the Kings of Alba’, p. 249)。この年代記は 10 世紀末の記述で終わっているが、ケネスに関する文章に断絶や混乱があり、この部分は後代の挿入とされる。Dumville (2000), p. 75; Broun (2007), p. 73.

²³ ただし、「アルスター年代記」でこれが顕著になるのは 939 年からである。Dumville (1982), pp. 331-32.

(Peohtas) からスコット (Scottas) へと英語の表記も変わっている²⁴。しかも、ほぼ同じ時期からピクトに関する言及は姿を消す。表記の変化は「アルスター年代記」の書記の書き間違いや気まぐれではないようである²⁵。

この変化をどのように説明するか。ケネスによるピクト併合と新王国建設を否定する研究者は数多いが、ケネスらがピクト王とされたことや900年頃にピクトへの言及が消滅したことについて、説得力ある説明はいまだに聞かれないのが現状である²⁶。もちろん史料がほとんどない状況であり、推測も容易ではないが、考古学や言語学、地名学の研究成果を援用すれば、筆者はかなり早い時期からスコットがピクトの領域に、特にストラスアーンに定住していたと考える。たとえば、7世紀初めにピクト王であった二人の兄弟は、父親がダール・リアダのコムガル一族（ケネール・コヴガル）であることがあきらかにされ²⁷、また、彼らの一部が、コムガル一族の崇敬

²⁴ *Anglo-Saxon Chronicle* の875年の項ではフォース湾以北の住民はピクト‘Peohtas’であるが（MSS. A, B, C, D. ただし、B, Cは876年の項にある）、920年（MS. A）、937年（MSS. A, B, C, D）には‘Scottas’に変わっている。なお MSS. B, C, Dには920年の項はない。

²⁵ 10世紀、11世紀の「アルスター年代記」のスコットランド関係の記述はダンケルドから情報を得ていたとされる。Broun (1999b); Broun (2007), pp. 85–86. アイオナが相次いでヴァイキングに襲撃されたのを機に、9世紀中葉にコルンパの聖遺物はあらたにアイルランド中部のケルズに創設された修道院とスコットランドのダンケルドに創設された修道院に二分され移されている。スコットランド情報はこのルートでアイルランドに送られたのであろう。*Annals of Ulster*: 849, 878; ‘Chronicle of the Kings of Alba’, p. 250.

²⁶ わずかに触れているのが Charles-Edwards (2008, p.187) である。

²⁷ Clancy (2004b), pp. 131–37. ピクト王 Bredei filius Derilei (ゲール語形 Bruide f. Derile, 706年没) と Nectan f. Derilei (同じく Nechtan f. Derile) の Derilei は母親名であり、父親はケネール・コヴガルの傍系の Dargart m Finguine という。ちなみに、Bredei は「アダムナーン法」(697年頃)の保証人の一人であり、Nectan は710年頃に復活祭の期日の算定方法についてベーダの修道院の院長との間で書簡を交わしている。Ní Dhonnchadha

する聖人サーフとのかかわりからストラスアーンからファイフのクーロス(Culrose)にかけての地域にいることをうかがわせる史料もある²⁸。コムガル一族の本拠地はアーガイル地方東部のカウアル(Cowal)にあり、山を隔ててすぐ東が沃野の広がるストラスアーンである。741 年にダール・リアダがピクト王に征服され属国になると、スコットの定住がいつそう進み、9 世紀初頭からのヴァイキングの襲撃はこれに拍車をかけることになったと推測されるのである。

この推測を裏づける資料の一つが、ストラスアーンのフォーティヴィオトの斜面に立っていたダブリン・クロスである(図 2)。この十字架の重要性は、中央の碑文と十字架の建立された場所にある。まず碑文であるが、ほとんど判読不能な状態であったが、後述のようにフォーティヴィオトの「王宮」‘palacium’でケネス・マク・アルピンが病死したという史料があることから、この十字架はこれまでは「ケネス・マク・アルピンによるピクトランド征服をおおやけに宣言した記念碑」であり、ハーブを奏でるダヴィデの像は「神によるケネスの王位の承認」を表すと解釈されてきた²⁹。しかし、1995 年に K. フォーサイスが碑文の一部を解読すると、この解釈は完全に否定された。碑文の冒頭は、ピクト名をゲール語で表した人名であり、

(2001), p. 59; Bede, V-21 (pp. 532-52).

²⁸ *Corpus Genealogiarum Sanctorum Hiberniae*, § 722-106 (p. 181). 12 世紀のストラスアーンでは St. Serf, St. Bláan (Blane), St. Kessog, St. Bean などカウアル地方で崇敬された聖人に奉献された教区教会が多い。その代表が聖サーフであるが、崇敬の中心であったクーロス(Curloss)は、地理的にはファイフに位置し本来はセント・アンドルーズ司教区に属するはずであるが、中世を通してストラスアーンのダンブレイン司教区に属している。これもケネール・コヴガルとストラスアーンとの関連をうかがわせる事例である。*Inchaffray Charters*, nos. 14-15, 31; *RRS II*, no. 432.

²⁹ Alcock & Alcock (1992), pp. 236-41. なお、フォーサイスの解読を受けて、アルコック夫妻はすぐに自説の見直しを表明した。Alcock & Alcock (1996), pp. 455-57.

図2 ダブリン・クロスとダニングのセント・サーフ教会



1 Dupplin Cross 【裏面】

アーン川を挟んでフォーティヴィオトを見おろす斜面に立っていたが、保護のためエディンバラの国立博物館に収蔵されると、地元の強い反対にあい、セント・サーフ教会内に移された。



2 St Serf Church, Dunning, Perthshire

塔は1100年頃の建設とされ、後方(Laird's loft)は1687年に増築、19世紀初頭に改装された。



3 Dupplin Cross
(セント・サーフ教会内)



4 正面（東向き）

十字架の形は石板を十字架状に切り取った‘free standing’であり、石板に十字架を浮き彫りにしたピクトの十字架‘cross slab’とは異なるが、B、Cの人物の描き方は、横向き、王らしき人物には口ひげと大きな頭など、典型的なピクト様式である。



5 裏面（西向き）



6 碑文

H の碑文は、‘CUSTANTIN FILIUS FIRCUS’ と解説され、B の人物はピクト王 (789–820) の Caustantín m. Fergus と同定された。



7 側面（北向き）

F の図像は、「詩篇」33：2「琴をもって主を賛美せよ」のダヴィデを想起させる。

図版出典：1，4，5，7：© Crown Copyright HES. Licensor www.scran.ac.uk.
2，3：筆者撮影 6：Forsyth (1995), p. 241 から転載

789 年頃から 820 年までピクト王であった ‘Caustantín m. Fergus’ の名前と同定したからである。しかも、父の名前の語尾が間違っており、ゲール語に不慣れな様子がかがわれるという³⁰。フォーサイスの碑文解説は、ケネスによるピクトランド征服説に決定的な打撃を与えることになるが、それとともに筆者が注目したいのは、ピクトの領土であるフォーティヴィオトに、王の名前をピクト語ではなくゲール語で表記した十字架を建てたことである。ゲール語の話者であるスコットはすでに定住していたと推測されるのである。

次にダブリン・クロス の場所について、この十字架は相当長いあいだギャスク村の斜面に立っていたようであるが (図 2-1)、考古学調査によって、もともとはアーン川を挟んで対岸のフォーティヴィオトにあり、そのピ

³⁰ Forsyth (1995), pp. 240–41. ‘CUSTANTIN FILIUS FIRCUS’ は、本来であれば ‘CUSTANTIN FILIUS FIRCUSSU’ となるべきという。建立したのは、ゲール語の話し手ではないと思われる。Woolf (2007), p. 65.

クトの「王宮」の敷地内に建立されていたことがあきらかにされた。おそらく、教会堂の傍にあったと推測される³¹。フォーティヴィオトがピクトの王宮所在地だったことは、1820年代に近くの川から発見された「フォーティヴィオト・アーチ」（図3）によって予想されていたが³²、20世紀末の考古学調査によって、「王宮」に付属した教会堂の構造物の一部であり、その入り口を飾っていたことが確認されたのである³³。つまり、ダブリン・クロスと同じ場所にあったことになる。確かに人物の描き方は酷似している。おそらく同じ彫刻家かその一派の制作であろう³⁴。

フォーティヴィオトでは2006年からグラスゴー大学のT.ドリスコルを中心に大規模な調査が実施中であり、ここが先史時代からピクト時代において聖地として埋葬地として、また王宮所在地として継続して使用されたことが証明されつつある³⁵。ピクト王は、「フォルトリウの王」とも呼ばれたように、もともとピクトランド北東部、マリ湾岸を権力基盤とする王家であったが、7世紀後半からピクトランド南部をも従えて、ピクトの上王権を掌握した³⁶。おそらく南部における基盤として、肥沃かつ古くから由緒

³¹ Driscoll (2002), p. 13.

³² Skene (1857), pp. 271-79.

³³ Alcock and Alcock. (1992), pp. 238-42.

³⁴ 「フォーティヴィオト・アーチ」とピクトの他の石造彫刻との関連について詳しくは Henderson and Henderson (2004), pp. 191-92. なお Aitchison (2006, pp.198-201) は、アーチの図像は教会堂建設の起工式を描いたもので、図中央の損傷した部分は十字架で、向かって左の人物は王、右の二人は聖職者であり、杭打ちを行っていると解釈する。

³⁵ 'Strathearn Environs and Royal Forteviot (SERF)' Project. 詳しくは <http://www.gla.ac.uk/schools/humanities/research/archaeologyresearch/projects/serf/>

³⁶ 上掲註15参照。「フォルトリウの王」'rex Fortrenn'の初出は「アルスター年代記」693年で、この年に死亡した Bruide f. Bile にこの称号が付されている。ちなみにこの王は「ダンニヒェンの戦い」（685）でノーサンブリア王エッジリス（Ecgrifh）を打ち破った王である。

図 3 ストラスアーン地域とフォーティヴィオト・アーチ



Foster (2014), p. 59 より転載

Forteviot Arch



スコットランド国立博物館所蔵

© Trustees of the National Museum of Scotland

のある地であるフォーティヴィオトが選ばれ、「王宮」が築かれたのであろう。王宮建造の時期は不明であるが、ダブリン・クロスは、ピクトランド南部に対して「フォルトリウの王」の権威を誇示しただけでなく、それ以上にこの地域に定住したスコットに対するメッセージであったと解釈できる。「アルスター年代記」は、839年にヴァイキングの攻撃によって「フォルトリウの人びと」が戦死したことを記録している。この年代記が次にフォース湾以北について記すのは、858年の「ピクト王ケネス・マク・アルピンの死亡」である。これ以後、ケネスの子孫が9世紀末まで「ピクト王」と記されたことは、すでに述べたとおりである。また、「アルバ諸王の年代記」によれば、ケネスはフォーティヴィオトの「王宮」で病死したと

いう³⁷。

以上の記述やストラスアーンでの動向を総合すれば、北東部のフォルトリウがヴァイキングの攻撃で壊滅的な打撃を受けてフォルトリウの王統が絶えてしまい、南部でケネスがピクト王位につき、その子孫が後を継いだと考えられる。もしケネスが武力によってピクトを征服したのであれば、ダブリン・クロスを破壊したであろう。もしケネスがピクトの敵対者であれば、フォーティヴィオトの「王宮」には砦などの防衛設備を整えたであろうが、考古学調査によれば、砦などの形跡はないという³⁸。おそらく大きな抵抗もなく、ケネスは正統な「ピクト王」として受け入れられたのであろう。

ケネスの子孫がスコットでありダール・リアダ王家の出身であると主張するのは、第一章で見たように 10 世紀末からである。それが遺伝子レベルの事実であるかどうかは問題ではない。重要なのは、彼らが自らをそのように認識し、この認識に沿って過去を、つまり歴史を書いたことである。それが、「アルバの人びとの歴史について」であり、そこに示された系譜である。ここで初めてケネスの子孫は、ピクト的過去から離れ、ゲールとしての歴史認識を示したのである。この歴史認識は、13 世紀にも受け継がれていっそう入念な系譜書が作り上げられることになる。1249 年に執り行われたアレクサンダー 3 世の即位式は、この歴史認識の完成形とすることができる。

アレクサンダー 3 世の即位式については、ほぼ同時代の資史料がのこされている。その一つが即位式の舞台となったスクーン修道院の印璽であり、

³⁷ 'Chronicle of the Kings of Alba', p. 250. ケネスの弟もこの王宮に滞在したという。さらに王マルコム 4 世とウィリアム 1 世がフォーティヴィオトで証書をそれぞれ発給している。特に前者の証人には王の母の名前も見られ、12 世紀にもここに王宮が存在したと思われる。RRS I, no. 256 (1162×1164); RRS II, no. 17 (1165×1171).

³⁸ Alcock and Alcock. (1992), pp. 238-42.

即位式を視覚的に説明してくれる(図 4)。もう一つが 1280 年代に書かれた *Gesta Annalia* (年代記) で、そのなかに即位式について詳細な報告がある³⁹。これらの資史料に基づいて即位式を検証すれば、注目されるのは、詩人が王の系譜をゲール語で朗読したことである。これは、アイルランドの即位儀礼における詩人(ollamh)の役割と同じであり、アイルランドの伝統を受け継いだ儀式と言える⁴⁰。さらに重要なことに、詩人が読み上げた系譜は、王の祖先をケネス・マク・アルピンへ、さらにダール・リアダ王を経て「ファーガス・マク・エルク」へとさかのぼらせただけでなく、アイルランドの伝説上の王へとさかのぼらせている⁴¹。つまりスコットランド王は、単にダール・リアダの正統な王統に属するだけでなく、アイルランドにそのルーツがあることを宣言したのである。

即位式当時のスコットランドは、筆者のいう「スコットランドの成立」の最終段階にあたり、王の支配する土地が「スコットランド」と規定され、その土地の人びとは、文化的背景が何であれ、すべて共通の法と慣習のもとにある「スコットランド人」と定義されるようになっていた。12 世紀以降、王権が推進した「ノルマン・セツルメント」によって、スコットランドにはイングランドやフランスから多くの騎士らが移住してきたが、彼らもその子孫も、「スコットランドの成立」に力を貸すとともに、みずからも「スコットランド人」になっていったのである。*Gesta Annalia* によれば、アレクサンダー 3 世の即位式にも、アングロ・フレンチ系の重鎮らが参集

³⁹ *Gesta Annalia*, ch. 47-48 (pp. 293-95). この「年代記」は長いあいだ 14 世紀のフォーダンの作とされてきたが、その第一部はアレクサンダー 3 世の治世末の 1285 年の初めには存在していたことが Broun (1999c) によって証明された。この年代記は、アレクサンダー 3 世の即位式に関するもっとも「権威ある史料」と評されている。Broun (2007), p. 174.

⁴⁰ Bannerman (1989) pp. 120-49. バナマンはこの詩人こそがアレクサンダー 3 世を王にする「キング・メーカー」であるという (p.133)。

⁴¹ 朗読された系譜について、詳しくは Broun (1999a), pp. 183-87.

図4 アレクサンダー3世の即位式（1249）



Liber Ecclesie De Scon, i より転載

列席者（*Gesta Annalia* より）

王の右手側

下段：セント＝アンドルーズ司教，その後ろにファイフ伯

上段：コロンバの聖遺物を捧げるダンケルド司教

王の左手側

下段：スクーン修道院長，その後ろにストラスアーン伯

上段：王の系図（巻物）を読み上げる詩人，その後ろにハーブ奏者

していたが、式自体にかかわることはできなかったという。式の進行を務めたのはファイフ伯とストラスアーン伯であり、いずれも「ノルマン・セツルメント」以前にその存在が確認される家系である。コロンバの聖遺物を含めアレクサンダー3世の即位式は、すべて「ノルマン・セツルメント」以前にさかのぼる制度や慣行に則り、ゲールの伝統に従って、執り行われたのである。このような儀式を通して、「スコットランド人」とは、アイルランド人の子孫であるという歴史認識が示めされたのである

しかしながら、この歴史認識は、その後の展開のなかで変更を余儀なくされた。アレクサンダー3世が1286年3月に落馬事故で急逝すると、スコットランド王国では王位継承問題が泥沼化し、これが結果的にイングラント王エドワード1世の介入を招いてスコットランド独立戦争（1296－1314）へと突入することになる。しかも、イングランドとの戦いは戦場だ

けではなかった。教皇庁を舞台にイングランドとの「歴史論争」をも引き起こしたのである。この論争は、エドワード 1 世の武力介入に対して、スコットランド側が「王国共同体」の名前で教皇に上訴し、仲裁を求めたことに始まる⁴²。これを受けて教皇ボニファティウス 8 世が 1299 年にエドワード 1 世に対してスコットランドに対する宗主権の根拠を示すように求めると、1301 年 5 月からイングランド代表が「ブルートゥス伝説」を持ち出し、これに挑戦してスコットランド側はファラオの娘がアイルランドを経由してスコットランドに来了という起源伝説（「スコッタ伝説」）を主張するなど、両国の歴史的関係をめぐって激しい論争が続いた。この過程で、アイルランドとの系譜関係は、スコットランドが独立の国であるという主張と矛盾することになったのである。その結果、1320 年の「アープロウスの宣言」では、「スコットランドのネイション」はスキタイからスペインを経由して直接スコットランドに来了と主張し⁴³、これ以後アイルランドとの結びつきは完全に断ち切られることになる。

アレクサンダー 3 世が即位式で着座した「石」は⁴⁴、1296 年にエドワード 1 世によって持ち去られ、特別に作らせた「戴冠式の玉座」(Coronation Chair)にはめ込まれた。それ以来、現在のエリザベス女王に至るまで歴代のイギリス国王はスクーン「石」の上に着座して戴冠してきた⁴⁵。しかも、エドワード 1 世が持ち去ったのは、「石」だけではなく。エディンバラ城からも王冠や王笏、王剣など王権の象徴 (regalia) や多数の宝石と聖遺物そして大量の証書や記録などを、それぞれ運び出させてロンドンに送ら

⁴² 論争の史料は *Anglo-Scottish Relations*, nos. 28-31. 詳しくは常見信代 (2002), 163-170 頁。

⁴³ *Declaration of Arbroath*, p. 9.

⁴⁴ 「石」はやがて「運命の石」とよばれることになる。その初出史料が '*Liber Extravagans*', p. 68.

⁴⁵ 持ち去られてから 400 年目の 1996 年にスコットランドに返還され、現在、エディンバラ城内で公開されている。

せたのである。持ち去られた証書・記録類は大小の箱で合計 65 個にものぼったという⁴⁶。これは単なる掠奪ではない。スコットランド王国とその過去の歴史を抹消する行為であり、スコットランドが独立国でない証拠とするためであった。最終講義の副題としてかかげた「スコットランド中世史研究の問題」とは、一言でいえば、「史料がない」ことであり、エドワード 1 世の蛮行はいまも続いているのである。

むすびにかえて

最終講義のために用意した原稿を読み直したところ、枝葉末節な議論を繰り返しただけのようであり、「史料と解釈」などという大げさな表題をつけたことをいまも後悔し反省している。そのため、最終講義の前半部分だけを掲載することにしたが、結果的には 10 年来の宿題である「ピクトからスコットへ」について、悩み話を聞いていただくようなことになってしまった。みなさまのご寛容を切に願う次第である。

最後に、このような機会を設けていただき人文学部の諸先生、ならびに最終講義にお集まりいただいた教職員のみなさまに、あらためて深く感謝申し上げます。なかでも、大勢の現役学生に加えて多くの卒業生が遠方からも駆けつけてくださったことは、教師生活を閉じるにあたって、これにまさる喜びはありません。ありがとうございました。

⁴⁶ *Anglo-Scottish Relations*, no. 25. なお、1327 年 3 月にイングランドとの間で調印された和平協定では、接収された文書類の返還が明記されたが、実際に返還されたかどうかかわかっていない。さらに、17 世紀半ばのクロムウェル軍による占領期でもエディンバラ城から政府関係文書がロンドンに運ばれた。このうち、私人の権利に関する文書類は 1657 年に返却されたが、公文書類はスコットランドに運ばれる途上で消失したという。 *Ibid.*, no. 41.

引用文献

- Aitchison, N. K. (2006), *Forteviot: A Pictish and Scottish Royal Centre*, Stroud.
- Alcock, L. (1970), 'Was there an Irish-Sea Culture-Province in The Dark Ages?', in D. Moore (ed.), *The Irish Sea Province in Archaeology and History*, Cardiff, pp. 55-65.
- Alcock, L and Alcock, E. A. (1992), 'Reconnaissance excavations on . . . Royal sites in Scotland', *Proc Soc Antiq Scot*, vol. 122, pp. 215-87.
- Alcock, L and Alcock, E. A. (1996), 'The context of the Dupplin Cross', *Proc Soc Antiq Scot*, vol. 126, pp. 455-57.
- Anderson, M. O., *Kings and Kingship in Early Scotland*, Edinburgh (1973, 1980, 2nd. ed., 2011, rep).
- Anglo-Saxon Chronicle: A collaborative edition*, Cambridge
- MS. A: a semi-diplomatic edition with introduction and indices*, ed. by J. M. Bately, 1986.
- MS. B: a semi-diplomatic edition with introduction and indices*, ed., by S. Taylor, 1983.
- MS. C: a semi-diplomatic edition, with introduction and indices*, ed., by K. O'Brien O'Keefe, 2001.
- MS. D: a semi-diplomatic edition with introduction and indices*, ed., by G. P. Cubbin, 1996.
- Anglo - Saxon Chronicle: A Revised Translation*, ed., by D. Whitelock with D. C. Douglas and S. I. Tucker, London, 1961.
- Anglo-Scottish Relations 1174-1328: Some Selected Documents*, ed., by E. F. L. Stones, Edinburgh, 1965.
- Annals of Tigernach*, ed. by W. Stokes in *Revue Celtique*, vols. 16-17 (from MS. Rawlinson B 502) & vol. 18 (from MS. Rawlinson B 488), 1895-1897, rep. 2 vols, Felinfach, 1993; digital edition: <http://www.ucc.ie/celt/online/G100002/>.
- Annals of Ulster to A. D. 1131*, ed., by S. Mac Airt & G. Mac Niocaill, Dublin 1983. Text from Dublin, Trinity College Library, MS 1282, scribe Ruaidhri Ó Luinín (to AD 1489), additional hands to 1504, 1510(?)].
- Bannerman, J. (1974), *Studies in the History of Dalriada*, Edinburgh.

- Bannerman, J. (1989), 'The King's Poet and the Inauguration of Alexander III', *Scottish Historical Review*, 68, pp. 120-49.
- Bede, *Bede's Ecclesiastical History of the English People*, ed. by B. Colgrave and R. A. B. Mynors, Oxford, 1969.
- Broun, D. (1999a), *The Irish Identity of the Kingdom of the Scots in the Twelfth and Thirteenth Centuries*, Woodbridge.
- Broun, D. (1999b), 'Dunkeld and the Origin of Scottish Identity', in D. Broun & T. O. Clancy (eds), *Spes Scotorum: Hope of Scots*, pp. 95-111.
- Broun, D. (1999c), 'A new look at *Gesta Annalia* attributed to John of Fordun', in Crawford, B. E. (ed.), *Church, Chronicle and Learning in Medieval and Early Renaissance Scotland: Essays presented to Donald Watt on the completion of the publication of Bower's Scotichronicon*, Edinburgh, pp. 9-30.
- Broun, D. (2005), 'Alba: Pictish Homeland or Irish Offshoot?', in O'Neill, P. (ed.), *Exile and Homecoming, Papers from the Fifth Australian Conference of Celtic Studies*, University of Sydney, July 2004 (Sydney Series in Celtic Studies; Sydney, University of Sydney), pp. 234-75.
- Broun, D. (2007), *Scottish Independence and the Idea of Britain from the Picts to Alexander III*, Edinburgh.
- Campbell, E. (2001), 'Were the Scots Irish?', *Antiquity*, 75, pp. 285-92.
- Charles-Edwards, T. M. (2008), 'Picts and Scots', *Innes Review*, 59, pp. 168-88.
- 'Chronicle of the Kings of Alba', in Anderson, M. O., *Kings and Kingship in Early Scotland*, Edinburgh (1973, 1980, 2nd. ed., 2011, rep), pp. 249-253.
- Clancy, T. O. (2004a), 'Iona in the Kingdom of the Picts: a note', *Innes Review*, 55, pp. 73-76.
- Clancy, T. O. (2004b), 'Philosopher King: Nechtan mac Der-Ilei', *Scottish Historical Review*, 216, pp. 125-149.
- Clancy, T. O. (2010), 'Gaelic in Medieval Scotland: Advent and Expansion', *Proceedings of the British Academy*, 167, pp. 349-92.
- Corpus Genealogiarum Sanctorum Hiberniae*, ed., by Padraig ÓRiain, Dublin, 1985.
- Declaration of Arbroath*, ed., by J., Fergusson, Edinburgh, 1970.
- Driscoll, T. (2002), *Alba: The Gaelic Kingdom of Scotland, AD 800-1124*,

- Edinburgh, 2002.
- Dumville, D. N. (1982), 'Latin and Irish in the Annals of Ulster, AD 431-1050', in Whitelock, D. et al (eds.), *Ireland in Early Mediaeval Europe, Studies in Memory of Kathleen Hughes*, Cambridge, pp. 320-41.
- Dumville, D. (1993), 'St Patrick and the Christianisation of Dál Riata', in Dumville, D., and Lesley Abrams (eds.), *Saint Patrick, AD 493-1993, Studies in Celtic History 13*, Woodbride.
- Dumville, D. (1997), *The Churches of North Britain in the First Viking-Age. The Fifth Whithorn Lecture, 14th September 1996*, Whithorn.
- Dumville, D. N. (2000), 'Chronicle of the Kings of Alba', in Simon Taylor (ed.), *Kings, Clerics and Chronicles in Scotland, 500-1297: Essays in honour of Marjorie Ogilvie Anderson on the occasion of her Ninetieth Birthday*, Dublin, pp73-86.
- Dumville, D. (2002), 'Ireland and North Britain in the Earlier Middle Ages: Contexts for Míniugud Senchusa Fher nAlban', in C. Ó Baoill & N. McGuire (eds), *Rannsachadh na Gàidhlig 2000. Papers Read at the Conference Scottish Gaelic Studies held at the University of Aberdeen 2-4 August 2000 (Aberdeen, An Clò Gaidhealach)*, pp. 185-212.
- Duncan, A. A. M. (2002), *The Kingship of the Scots, 842-1292: Succession and Independence* Edinburgh.
- Forsyth, K. (1995), 'The Inscriptions on the Dupplin Cross', in C. Bourke (ed.), *From the Isles of the North: Medieval Art in Ireland and Britain*, Belfast, pp. 237-44.
- Foster, S. A. (1996), *Picts, Gaels and Scots*, Oxford (2004, 2nd. ed).
- Foster, S. A. (2014), *Picts, Gaels and Scots*, Oxford (new ed).
- Gesta Annae*, in W. F. Skene (ed.), *Johannis de Fordun, Chronica Gentis Scotorum*, Vol. 1, Edinburgh, 1871, pp. 254-383
- Grabowski, K. & D. Dumville (1984), *Chronicles and Annales of Medieval Ireland and Wales: The Clonmacnoise-Group Texts*, Woodbride.
- Henderson, G. and Henderson, I. (2004), *The Art of the Picts: Sculpture and Metalwork in Early Medieval Scotland*, London.
- Herbert, M. (2000), 'Rí Éirenn, Rí Alban: Kingship and Identity in the Ninth and Tenth centuries', in S. Taylor (ed.), *Kings, Clerics and Chronicles 500-1297. Essays in honour of Marjorie Ogilvie Anderson on the occasion*

- of her Ninetieth Birthday*, Dublin, pp. 62-72.
- Hudson, B. T. (2014), *The Picts*, Chichester.
- Inchaffray Abbey, W. A. Lindsay & J. M. Thomso (eds.), *Charters, Bulls and Other Documents Relating to the Abbey of Inchaffray, Chiefly from the Originals in the Charter Chest of the Earl of Kinnoull*, Edinburgh, 1908.
- 飯島啓二(1991)「スコットランド王国の形成」, 青山吉信編『世界歴史大系 イギリス史 1: 先史～中世』, 山川出版社, 121-132 頁所収。
- Lane, A. and Campbell, E. (2000), *Dunadd: An Early Dalriadic Capital*, Oxford.
- Liber Ecclesie de Scon: Munimenta Vetustiora Monasterii Sancte Trinitatis et Sancti Michaelis de Scon*, ed., by Cosmo Innes, Bannatyne Club publications, no. 78, Edinburgh, 1843.
- ‘*Liber Extravagans*’, in D. E. R. Watt (ed.), *Scotichronicon by Walter Bower*, vol. 9 (Critical Studies and General Indexes), Edinburgh, 1998, pp. 53-84.
- Ní Dhonnchadha, M. (2001), ‘The Law of Adamnán: a translation’, in O’Loughlin, T. (ed.), *Adomnán at Birr, AD 697. Essays in Commemoration of the Law of the Innocents*, Dublin, pp. 53-71.
- RRS I, Barrow, G. W. S. (ed.), *Regesta Regum Scottorum I: The Acts of Malcolm IV: King of Scots 1153-1165*, Edinburgh, 1960.
- RRS II, Barrow, G. W. S. & W. W. Scott. (eds.), *Regesta Regum Scottorum II: The Acts of William I: King of Scots, 1165-1214*, Edinburgh, 1971.
- Skene, W. F. (1857), ‘Observations on Forteviot, the Site of the Ancient Capital of Scotland’, *Archaeologia Scotica*, 4, pp. 271-79.
- Taylor, S. (2002), ‘Reading the Map: Understanding Scottish Place-Names’, *History Scotland*, vol. 2, no. 1 (Jan/Feb, 2002), pp. 13-14.
- 常見信代 (2002) 「スコットランドと『運命の石』——中世における王国の統合と神話の役割 (続)」『北海学園大学人文論集』20 号, 147-180 頁。
- 常見信代 (2014) 「『ケルト教会』と復活祭論争」『北海学園大学人文論集』57 号, 1-87 頁。
- 常見信代 (2015), 「アダムナーンの『聖コロンバ伝』を読む——史料とその問題点——」『新人文学』(北海学園大学大学院文学研究科), 173-237 頁。
- VC, Adomnán, *Vita Columbae*, ed., by A. O. and M. O. Andersons, Oxford, 1991 (2nd ed); *Life of St Columba: Adonman of Iona*, ed., by Sharpe, R., London: Penguin, 1995.

Woolf, A. (2006), 'Dun Nechtain, Fortriu and the Geography of the Picts',
Scottish Historical Review, 85, pp. 182-201.

Woolf, A. (2007), *From Pictland to Alba, 789-1070*, Edinburgh.